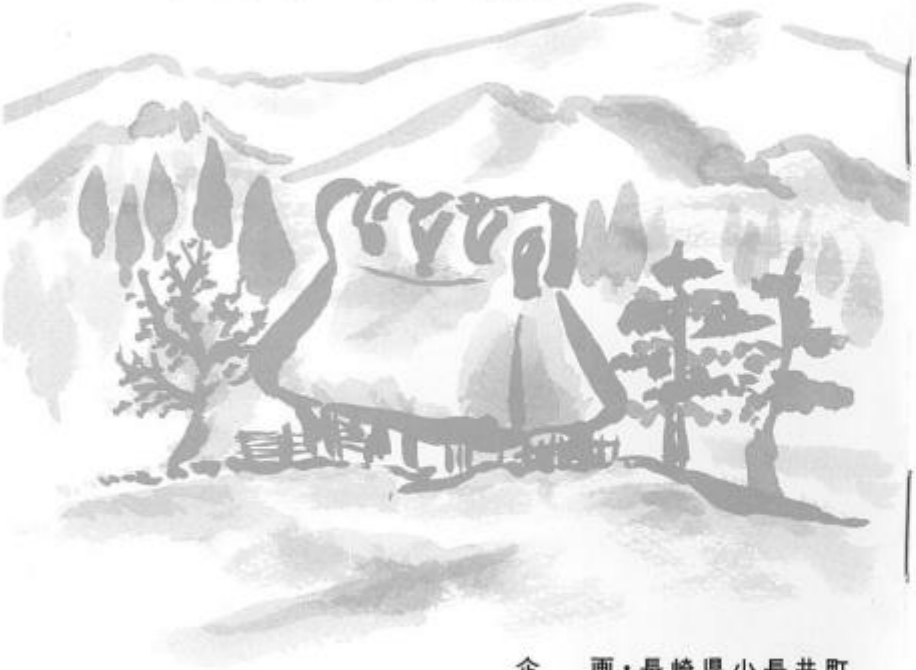
小長井町民謡

企　　画：長崎県　小長井町
音楽制作：株式会社サウンドワークス

小長井町民謡



企　画・長崎県小長井町
音楽制作・㈱サウンドワークス

目次

一、手まり歌……2
二、壁塗歌……3
三、琉球節……4
四、さのさ節……5
五、作米搗き歌……6
六、子守唄……8
七、女謡……9
八、篩の唄……10
九、石棒搗き歌……12
＊
十、たんす長持唄……14

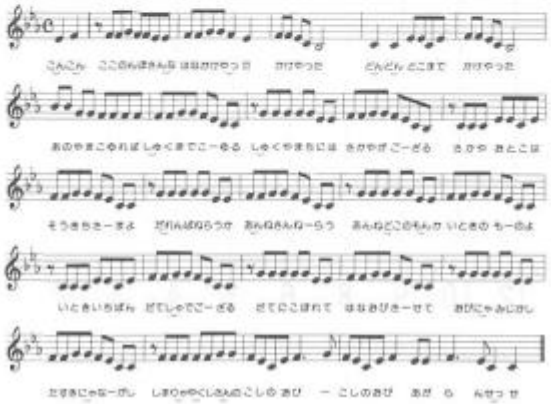
一、手まり歌

こんこーんここの婆（んば）さんな
鼻かけやった　かけやった
どんどんどこまでかけやった
あの山越ゆれば　宿までこーゆる
宿や町には酒屋がごーざる
酒屋男は宗吉（そうきち）さーまよ
だれんばをねらうか　姐（あんね）
さんねーらう
あんね　どこの者か　糸岐のものよ
糸岐一番だてしゃでごーざる
だてにこぼれて花おびさせて
おびにゃ短かし　たすきにゃなーがし
しまりゃ薬師さんの腰の帯　腰の帯
アガラーンセッセ

〔解説〕

昔のお正月には、振袖をつけたかわいい少女たちが、赤白のきれいな糸をかけた手づくりの鞠をつきながら、手鞠唄を合唱しかわるがわる遊んでいました。

今ではこのような光景は、すっかりみられなくなりました。



二、壁塗歌

一、壁のほげたなら左官さんに頼め
　　ナンノー　ノーヤーレ
　またもほげたなら　また頼め　嬶
　　ナンノー　ノーヤーレ
（はやし）ソリャヤレ　ソリャヤレ
あすこんたいも破げとる
ここんたいも破げとる
五月の田植えに　はらまにゃよかいどん
はらめば田植えの邪魔になる

二、お前さんとなら　庭家のすみも
　　ナンノー　ノーヤーレ
　二人暮しも　いとわせぬ　嬶
　　ナンノー　ノーヤーレ
（はやし）ソリャヤレ　ソリャヤレ
あすこんたいも破げとる
ここんたいも破げとる
五月の田植えに　はらまにゃよかいどん
はらめば田植えの邪魔になる

三、歌は声から　雪駄は緒から
　　ナンノー　ノーヤーレ
　男嫌うのは　女から　嬶
　　ナンノー　ノーヤーレ
（はやし）ソリャヤレ　ソリャヤレ
あすこんたいも破げとる
ここんたいも破げとる
唐いも焼酎樽の上ばん
五月の田植えに　はらまにゃよかいどん
はらめば田植えの邪魔になる

〔解説〕

昔の壁は、竹でエツイをした土壁がほとんどでしたが、左官のこどいが壁土をこねて丸めて左官に差し出し、左官が上手な腰つきでこれを受け止めて壁を塗っていました。

この左官の壁を塗る動作を面白く演じる壁塗踊りとともに、歌い継がれてきたのが「壁塗歌」です。

三、琉球節

一、琉球にこじゃるなら　わらじはいてこじゃれ
　琉球にキナハイ　石原小石原
　（はやし）
　シタリヤ　ヨメヨメ　シンにユタユタ
　シテガンガン　あセッセ

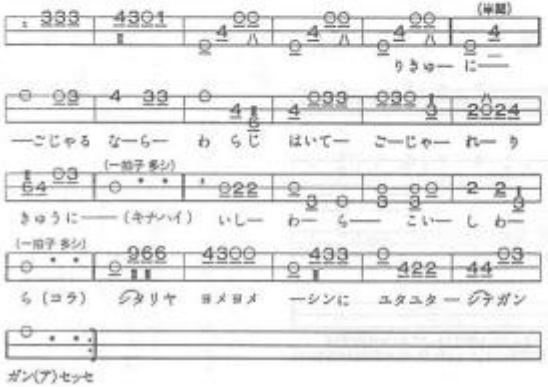
二、琉球と鹿児島はなぜ橋しゃかけぬ
　測がキナハイ横潮で橋しゃかけぬ
　（はやし）
　サッサ人力車にホロカケホロカケ
　トキャレッツノパッパあセッセ

三、琉球と鹿児島と地続きなれば
　会うてキナハイ酒もりして見たい
　（はやし）
　サッサヨカトノ若っかたばかでもかんまん
　トキャレッツノパッパあセッセ

四、琉球へ琉球へと草木もなびく
　琉球はキナハイ居よいか住よいか
　（はやし）
　サッサお前の方からほれたじゃないか
　トキャレッツノパッパあセッセ

五、来いと言たとて行かれうか琉球へ
　琉球はキナハイ四十九里波の上
　（はやし）
　サッサ此の子がおっては夫にさまたげ
　トキャレッツノパッパあセッセ

（本調子）
3本/4拍子



琉球節　唄・中村三津夫

〔解説〕
もともとは他国から流れてきた歌ですが、琉球節は、小長井ではずいぶんと古くから唄われていました。

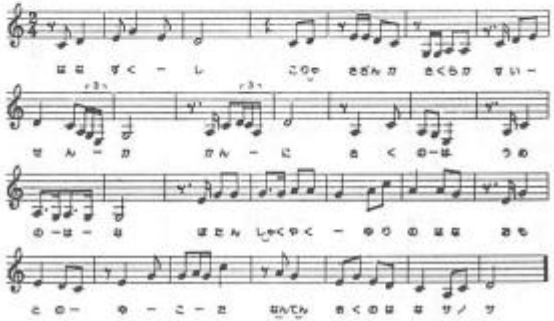
四、さのさ節

一、花尽し　コリャ山茶花　桜か水仙花
　寒に咲くのは梅の花
　牡丹しゃくやく百合の花
　おもとのいうこた　南天菊の花
　　サノサ

二、とり尽し　コリャ来松やんなウナギとり
　梅づやんな魚とり
　鼻んたっかけえんさんなキツネとり
　打越のかんだゆうさんな
　ねウサギとり
　足角の山下さんな子とり小鮒とり
　　サノサ

〔解説〕
明治三〇年頃から大正時代にかけて流行した歌で、歌の終りに「さのさ」という囃子ことばがつくところからさのさ節と言われました。

さのさ節　唄・横　よう子



五、作米搗き歌

アーリャーア
一、ちょっこんかっとん　ない米んば搗けば
あすはさまじょの　出船米よ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン

アーリャーア
二、出船米とて　白い米搗くな
米の白けりゃ　滞留するよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン

アーリャーア
三、搗いて加勢なら　唄までご加勢
ご加勢ぶりどんが　見ゆるごとよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン
（はやし）
ホラ臼の底茶碗皿　ふせごきやござらん
持ちあげた杵なら　遠慮なしおとし込め
アラチョイチョイ

アーリャーア
四、姉は眉目よし　妹は気よし
姉の眉目より　気にほれたよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン

アーリャーア
五、虎は千里の　山さえ越せど
障子一重が　ままならぬよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン

アーリャーア
六、唄は声から　雪駄は緒から
男きらうは　女からよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン
（はやし）
今夜こん様女は明日の晩もこらせん
来たてちゃ見もせん
横目もふりゃせん　それでも来るなら
へっちんぽうきで
はわきやらんかん
アラチョイチョイ

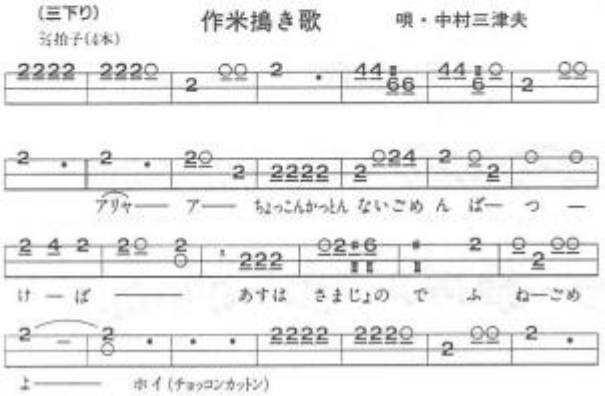
アーリャーア
七、思い出すばの　日にゃ二度三度
月にゃ百度も　二百度もよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン

アーリャーア
八、どうした縁かよ　嫁女がみぞか
育てられたる　親よりもよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン

アーリャーア
九、来いといわれて　その行く晩は
足の軽さよ　地につかんよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン

アーリャーア
十、好いたお方と　ない米んば搗けば
杵のあげよさ　おろしよさよ　ホイ
チョッコンカットン　チョッコンカットン
（はやし）
アラ臼の中たたくはさまじょうに言づけ
ことづけながらもねっからん通ぜん
通ぜんさまじょうに石燒てかませろ
石かみ面じょのおごぜの面たん
アラチョイチョイ

【解説】
大正の末頃までは、自給自足の時代であり、各家々では「うす」と「きね」を備えて、米や麦を搗いていました。
農閑期の晩は、地区の家々をめぐっての米つきが青年男女の仕事でありましたが、遅くまでの夜なべもきついどころか若者たちのレクレーションであり、男女交際の場でもありました。
この時の労働歌が「作米搗き歌」です。

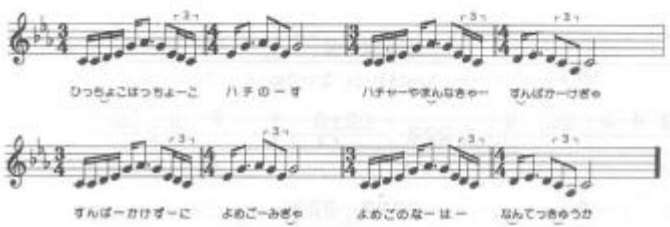


六、子守歌（七ちょこ八ちょこ）

七ちょこ　八ちょこ蜂の巣
蜂ちゃ山んなきゃ　巣んばかけぎゃ
巣んばかけずに　嫁ご見ぎゃ
嫁ごの名はなんてつきゅうか
べんつけ、かねつけ、花嫁ご
嫁ごたちゃ親首みやあい
今日はスズメの道つくり
何匹出てつくらるかあ　三匹出て作らっちゅ
あとのスズメもないわぬ
先のスズメもないわぬ
真中のスズメのいうことにゃ
わいたちゃわいたちゃ　花もいしゅう
花はなんの花もらおうか
あさこばなとゆうばなと
でんでん手箱にもりこんで
石のつまだにえたいば
はまははまじょうからさがされた
あがいぐちおじろでちゃいげふんだ
いげはなんのいげ　そんのいげ
うらのばっききん掘ってくいなれ
二、三日待っとれば掘ってくるだん
二、三日まっとればうみかえる
うみかえてつぶせばつぶしよか
オレロンオレロン　オレロンヨ

〔解説〕
子守歌は、いとしい子供の眠りを願う母のやさしい心のこもったものですが、母親は家事や労働に追われ、乳飲児を兄や姉が世話する場合が多く家によっては子守を雇うこともあり、これらが唄うものが多かったようです。

子守歌　唄・嶺　よう子



七、女謡（あんば節）

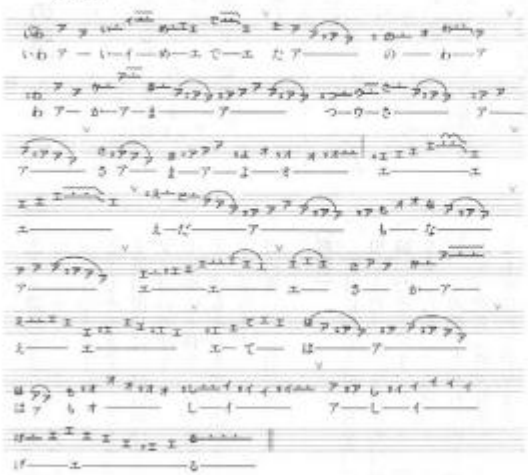
一、祝　目出度の
若松さまよ
枝もな
栄えて　葉も繁げる

二、これなごてすは
福ようなごてす
潮のな
みつごと　金のわく

三、とマけとマけと
末までとマけ
末はな
鶴亀　五葉の松

〔解説〕
あんば節は、女のお祝いの謡として受け継がれています。
嫁を迎えた家では、組内の主婦たちを呼んでごちそうをしますが、この時主婦たちがお祝いとしてこの謡をあげる習わしがあり、現在でも女たちの寄り合いや婚礼ではさかんに唄われています。

女謡（あんば節）　唄・中村三津夫

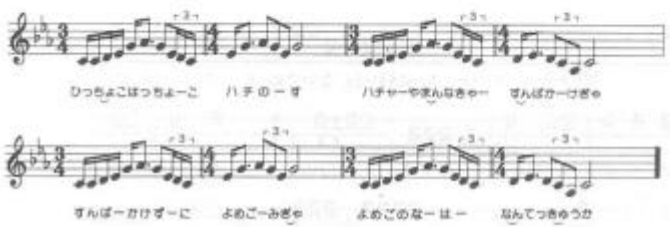


六、子守歌（七ちょこ八ちょこ）

七ちょこ　八ちょこ蜂の巣
蜂ちゃ山んなきゃ　巣んばかけぎゃ
巣んばかけずに　嫁ご見ぎゃ
嫁ごの名はなんてつきゅうか
べんつけ、かねつけ、花嫁ご
嫁ごたちゃ親首みやあい
今日はスズメの道つくり
何匹出てつくらるかあ　三匹出て作らっちゅ
あとのスズメもないわぬ
先のスズメもないわぬ
真中のスズメのいうことにゃ
わいたちゃわいたちゃ　花もいしゅう
花はなんの花もらおうか
あさこばなとゆうばなと
でんでん手箱にもりこんで
石のつまだにえたいば
はまははまじょうからさがされた
あがいぐちおじろでちゃいげふんだ
いげはなんのいげ　そんのいげ
うらのばっききん掘ってくいなれ
二、三日待っとれば掘ってくるだん
二、三日まっとればうみかえる
うみかえてつぶせばつぶしよか
オレロンオレロン　オレロンヨ

〔解説〕
子守歌は、いとしい子供の眠りを願う母のやさしい心のこもったものですが、母親は家事や労働に追われ、乳飲児を兄や姉が世話する場合が多く家によっては子守を雇うこともあり、これらが唄うものが多かったようです。

子守歌　唄・嶺　よう子



七、女謡（あんば節）

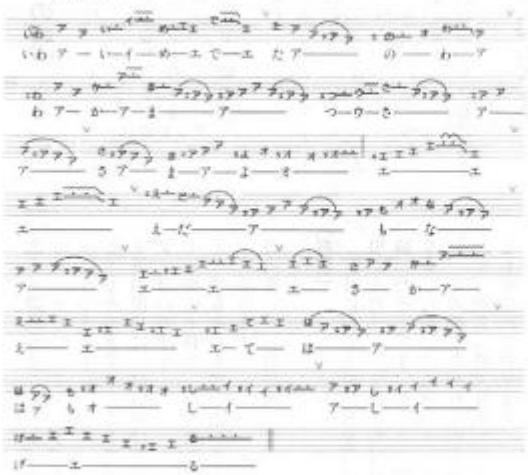
一、祝　目出度の
若松さまよ
枝もな
栄えて　葉も繁げる

二、これなごてすは
福ようなごてす
潮のな
みつごと　金のわく

三、とマけとマけと
末までとマけ
末はな
鶴亀　五葉の松

〔解説〕
あんば節は、女のお祝いの謡として受け継がれています。
嫁を迎えた家では、組内の主婦たちを呼んでごちそうをしますが、この時主婦たちがお祝いとしてこの謡をあげる習わしがあり、現在でも女たちの寄り合いや婚礼ではさかんに唄われています。

女謡（あんば節）　唄・中村三津夫

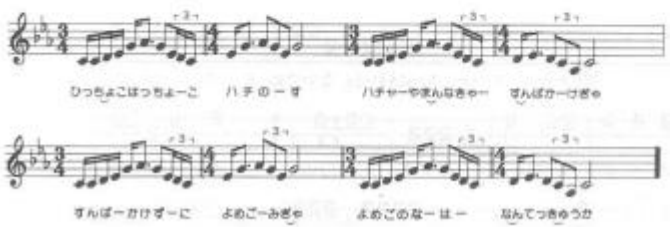


六、子守歌（七ちょこ八ちょこ）

七ちょこ　八ちょこ蜂の巣
蜂ちゃ山んなきゃ　巣んばかけぎゃ
巣んばかけずに　嫁ご見ぎゃ
嫁ごの名はなんてつきゅうか
べんつけ、かねつけ、花嫁ご
嫁ごたちゃ親首みやあい
今日はスズメの道つくり
何匹出てつくらるかあ　三匹出て作らっちゅ
あとのスズメもないわぬ
先のスズメもないわぬ
真中のスズメのいうことにゃ
わいたちゃわいたちゃ　花もいしゅう
花はなんの花もらおうか
あさこばなとゆうばなと
でんでん手箱にもりこんで
石のつまだにえたいば
はまははまじょうからさがされた
あがいぐちおじろでちゃいげふんだ
いげはなんのいげ　そんのいげ
うらのばっききん掘ってくいなれ
二、三日待っとれば掘ってくるだん
二、三日まっとればうみかえる
うみかえてつぶせばつぶしよか
オレロンオレロン　オレロンヨ

〔解説〕
子守歌は、いとしい子供の眠りを願う母のやさしい心のこもったものですが、母親は家事や労働に追われ、乳飲児を兄や姉が世話する場合が多く家によっては子守を雇うこともあり、これらが唄うものが多かったようです。

子守歌　唄・嶺　よう子



七、女謡（あんば節）

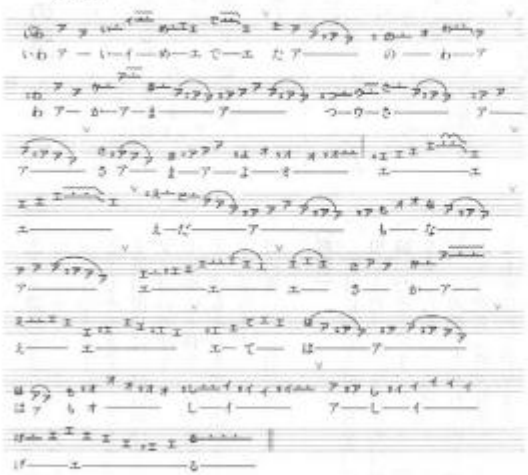
一、祝　目出度の
若松さまよ
枝もな
栄えて　葉も繁げる

二、これなごてすは
福ようなごてす
潮のな
みつごと　金のわく

三、とマけとマけと
末までとマけ
末はな
鶴亀　五葉の松

〔解説〕
あんば節は、女のお祝いの謡として受け継がれています。
嫁を迎えた家では、組内の主婦たちを呼んでごちそうをしますが、この時主婦たちがお祝いとしてこの謡をあげる習わしがあり、現在でも女たちの寄り合いや婚礼ではさかんに唄われています。

女謡（あんば節）　唄・中村三津夫



十、たんす長持唄

（旅立ち）

一、ハァー今日はナーヨー日も良し
天気も良しよナー
ハァー結びナーヨー合わせて
ハァー縁となるよナー

二、ハァーそろたナーヨーそろたよ
くもすけきんがそろたよー
ハァー秋のナーヨー出穂よりゃ
ハァーなおよくそろたよー

三、ハァーわたしゃナーヨーくもすけ
はんてんそだちよー
ハァー長いナーヨー着物にゃ
ハァー縁がおそいよー

四、ハァーわたしゃナーヨー行きます
ご両親様よナー
ハァー永くナーヨーお世話に
ハァーなりましたよナー

五、ハァーこれほどナーヨーしこんで
あの出すからにゃよー
ハァー二度とナーヨーふたたび
ハァー帰るじゃないぞエー

六、ハァー舟はナーヨー帆まかせ
帆は風まかせよー

ハァー沖のナーヨーあらしじゃ
ハァーまいもどるよナー

七、ハァー蝶よナーヨー花よと
育てた娘でもよナー
ハァー今じゃナーヨー他人の
ハァー手にわたるよナー

八、ハァーわたしゃナーヨー立ちます
近所の方よナー
ハァー後のナーヨーふた親
ハァーたのみますよナー

（道中）

一、ハァーここはナーヨー小長井の
関所でござるよー
ハァー唄をナーヨー唄わにゃ
ハァー通しゃせぬぞエー

二、ハァー関所ナーヨー番所は
昔のことよナー
ハァー今はナーヨー関所は
ハァーはやりゃせぬぞえー

三、ハァー所望ナーヨー所望なら
三斗樽すえてナー
ハァー唄をナーヨー唄わにゃ
ハァー通しゃせぬぞエー

四、ハァー所望とナーヨーあるなら
三斗樽すえてよナー
ハァー飲んだナーヨー気分で
ハァー唄いますよナー

五、ハァー所望だナーヨー所望だと
呼び止められてよナー
ハァー唄のナーヨー字しらず
ハァー文字しらずよナー

六、ハァーさあさナーヨーお立だよ
お名残り惜しやナー
ハァー今度ナーヨー来る時ゃ
ハァー孫つれてよナー

七、ハァー見えたナーヨー見えたよ
ご城下が見えたよー
ハァーおろしナーヨーください
ハァー一の枝をよー

（受取り）

一、ハァー今日はナーヨー遠方から
ご苦労さんでござるよー
ハァーわたしゃナーヨー居ながら
ハァー持ち受けましたナー

二、ハァー潮はナーヨー満潮
船走り込むよナー
ハァータンスナーヨー長持ちゃ
ハァーにない込むよナー

三、ハァータンスナーヨー長持ちゃ
おそまつなれどナー
ハァー中のナーヨー品物は
ハァーぼろばかりよナー

四、ハァータンスナーヨー長持ちゃ
七竿八竿ナー
ハァー中のナーヨーご衣装は
ハァーあやにしきよナー

五、ハァーこなたナーヨーお家は
きれいなやかたよナー
ハァー庭にゃナーヨーせんすい
ハァー築山までもよナー

六、ハァータンスナーヨー長持ち
受け取るからはナー
ハァー二度とナーヨー再び
ハァーもどしゃせぬよナー

七、ハァー槍はナーヨーなげしに
刀はさやによナー
ハァータンスナーヨー長持ち
ハァーなんどにおさむよナー

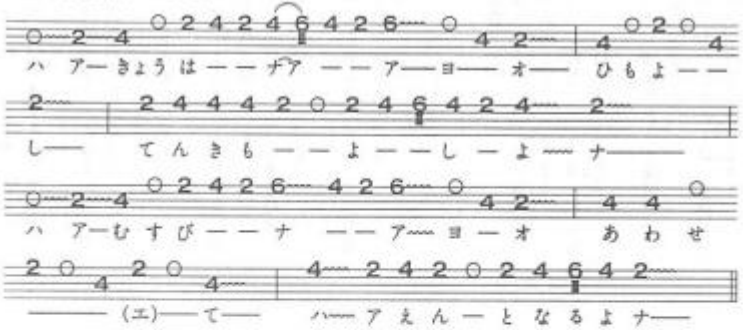
八、ハァー祝いナーヨー目出度の
若松様よナー
ハァー枝もナーヨー栄えて
ハァー葉も繁るよナー

（本調子）

3本（三味トレモロ）尺八

たんす長持歌

唄・中村三津夫



〔解説〕

江戸時代からはじまった農村の婚礼の唄で、花嫁のタンスや長持を、婿方の家にいない運ぶ際に唄われました。

歌詞については、即興で面白く作られる場合もあったそうですが、旅立ち・道中・受取りとそれぞれの場面での唄があり、儀式としても唄われました。

企画・長崎県小長井町

音楽制作・株式会社サウンドワークス

三味線・中村三津夫／高堂 淑恵

尺八・笛・林 佑喜雄

鳴物・高堂 嶺州

太鼓・鉦・中村 敏子